

三浦綾子「道ありき」

【あらすじと概説】

17歳から小学校教師をしてきた三浦(旧姓・堀田)綾子は、敗戦を迎え、自分の教えてきたことが間違っていたことに深い罪責の思いにさいなまれ、虚無感に満たされる。7年間続けてきた教職を辞し結婚を決意するが、結納が届くその日に病に倒れ13年間の闘病生活を始める。婚約解消、自殺未遂という絶望のどん底の日々を過ごしていたが、自分をもっと大切にする生き方をして欲しいと叫ぶ幼なじみの前川正の祈りが、やがて彼女の魂を動かし始める。最愛の恋人の死、全国の結核患者から寄せられた励ましの手紙など、闘病生活から夫・三浦光世との結婚までを記した愛と真実を問いかける作家・三浦綾子の自伝小説の青春編である。

三浦綾子の全作品を貫く「まじめに生きる」ことの原点、読者との文通をどこまでも大切にした執筆生活の原点が散りばめられた、作家・三浦綾子を理解するうえで不可欠、かつ最適な代表作である。

1. 生きる目的を見失った虚無・生徒に誤りを教えた罪責

軍国教師として生徒たちに間違っていたことを教えたことに深い罪責の念を抱いた堀田綾子は、教壇に立つことができなくなった。日本は天皇を神とする神国で必ず戦争に勝つと信じて疑わず、生徒たちに天皇陛下のために生きるように、大真面目に教えていたからである。昭和21(1946)年3月末に教師を辞めるが、結婚の二重約束など虚無的な生き方の中で、自殺を企てるが、婚約を辞退した相手によって命を助けられる。生きる目的を見失った彼女は不治の病である肺結核の闘病生活を始める。

わたしは七年間、一体何に真剣に打ちこんできたのだろう。あんなに一生懸命に教えてきたことが誤りなら、わたしは七年をただ無駄にただけなのだろうか。いや誤ちを犯したということは無駄とは全くちがう。誤ちとは手をついて謝らなければならないものなのだ。(16~17頁)

…自分本位な考え方で、この発病を心ひそかに喜びさえしたのである。それは、生徒たちに誤ったことを教えたことを教えたという自責の念が肺結核発病によって、やっと薄らぐような思いがしたからである。(21頁)

私はまたしてもこの手が自分では制御しがたい罪を犯して行くのではないかとゾッと致し…(47頁)

何のためにまじめに生きなければならないの。戦争中、わたしは馬鹿みたいに大まじめに生きて来たわ。まじめに生きたその結果はどうだったの。もしまじめに生きなければ、わたしはもっと気楽に敗戦を迎えることができたはずだわ。生徒たちにすまないと思わずにすんだはずだわ。(65頁)

わたしはここで死んだとしても、それほど残念だとは思わなかった。生徒たちに対して、すまないと思いつづけて来たからばかりではなかった。わたしには、生きる目標というものが見つからなかったのである。何のためにこの自分が生きなければならないのか、何を目当てに生きて行かなければならないか、それがわからなければどうしても生きていけない人間……(25頁)

何の目的で生きているのかわからない生活に、わたしは次第に無気力になり、怠惰になり、うみ疲れていたのだ。(57頁)

わたしは時々自分でギョッとすることがあった。(わたしは何のために生きているかわからないのに、どうしてこんなふうに多くの人と話し合い、会の仕事をして行くことができるのだろう)(41頁)

だが、後になって思ったのは、自分の死に対してさえ、真剣でもなく熱心でもなかったということである。(自分の死に対してさえ真剣になり得ぬ者が、どうして毎日の生活に真剣であり得よう)(74頁)

人間の目は、ほんとうに生きるために大事なものを全部見ているとは思えなかった。否、生きるために一番大事なものを、人間の目は見るできないような気さえた。(29頁)

…自分自身、生きるということが、どういうことかわからず、目的もなくただ生きていたから、他の人々もまた無目的に生きているに過ぎないものに思えた。(50頁)

この妹の手が私の手の中で次第に冷たくなっていくのを、どうしてもやることもできなかった時、十三歳のわたしは、死というものを観念ではなく事実として知った。(37頁)

男性をきれいなものに思い描いていて、その思い描いた幻と結婚したりするから、世には不幸な結婚も多いのですよ。(107頁)

2. 信ずることへの恐れから信ずることへ・本当の愛

死人のようになって療養している堀田綾子の前に、幼なじみの前川正が現れる。彼も同じ病のために大学の医学部を休学し療養していた。真面目に生きたことを後悔し、結核患者であるのに自分を大切にしない自堕落な生き方をしている彼女に対して、真面目に生きて欲しい、そのままではまた死んでしまうと前川正は訴えた。堀田綾子は、信じること、まじめに生きることの愚かさを嘲笑っていたが、恋愛を超えたクリスチャンである前川正の愛が、彼女に信じること、愛することを求める思いを抱かせた。